更新　2018年8月7日
2018年11月5日
2018年11月7日

統計学 One Point 9

計算代数統計
グレブナー基底と実験計画法
正誤表

【12ページ】

式 (1.8)

(誤) $\langle f_1, \ldots, f_r \rangle = \{h_1 f_1 + \cdots + h_r f_r \mid h_1, \ldots, h_r \in K[x_1, \ldots, x_r]\}$

(正) $\langle f_1, \ldots, f_r \rangle = \{h_1 f_1 + \cdots + h_r f_r \mid h_1, \ldots, h_r \in K[x_1, \ldots, x_n]\}$

【13ページ】

本文下から5行目

(誤) $\mathbf{V}(\langle f_1, \ldots, f_r \rangle)$ の任意の元 f について，

(正) $\langle f_1, \ldots, f_r \rangle$ の任意の元 f について，

【27ページ】

式 (1.14) の最後の行

(誤) $u_1^{(b-1)} y^{b-1}, \ldots, u_{S_{b-1}}^{(b-1)} y^{b-1}$

(正) $u_1^{(b^*-1)} y^{b^*-1}, \ldots, u_{S_{b^*-1}}^{(b^*-1)} y^{b^*-1}$

【99ページ】

式 (2.23) の上の行に，以下の脚注を追加する．

(脚注) 例えば一つ目の関係式を $x_1(x_1-1)(x_1-2)(x_1^2+1) = 0$ と置き換えた連立方程式も，$\mathbb{Q}^4$ 上で同じ D_4 を定める．このような「考えている体上で根をもたない余分な因子」があると，連立方程式が定めるイデアル I よりも $\mathbf{I}(\mathbf{V}(I))$ が大き

くなる，ということが起こりうる．Hilbert の（強）零点定理（式 (2.18)）は，このような状況を説明している．

【118 ページ】

定義 2.10 の式

(誤) $\mathrm{Est}_{\prec}(D) = \{u \mid u \in M_n \notin \mathrm{in}_{\prec}(\mathbf{I}(D))\}$

(正) $\mathrm{Est}_{\prec}(D) = \{u \in M_n \mid u \notin \mathrm{in}_{\prec}(\mathbf{I}(D))\}$

訂正してお詫びいたします.

著者